翻　訳

彭利貞著

現代中国語情態動詞の意味体系

――その単義性と多義性――

薛　　鳴（訳）

［解題］

本稿は彭利貞（2007）『中国語モダリティ研究』（原題《现代汉语情态研究》，中国社会科学出版社）の第二章の第三節を翻訳したものである[1)]。著者は浙江大学人文学院中国語言文学系教授。本書は復旦大学中文系中国語学専攻の博士論文を加筆したもので，シリーズ「言語と認知科学」（全 8 巻）の中の一冊である。472 頁に及ぶ本書は六章から構成されている。

第一章「情態の意味体系」はモダリティについて先行研究を踏まえながら，論理学と言語学の立場からモダリティを認識的モダリティ，道義的モダリティ，動力的モダリティに分けることの合理性を論じた。第二章の「中国語情態動詞の表すモダリティ」は先行研究を検討し直し，モダリティを表す主要手段である「情態動詞」について，その名称，位置付け，機能，分類の基準などから考察し，「動詞―情態動詞―副詞」という連続体の仮説を提起した。第三章「情態と情状」は動詞の情状（性状）的特徴（静態動詞か動態動詞か）が多義的情態動詞と共起したときの意味解読に与える影響を考察した。第四章「情態と体」はモダリティとアスペクトの関係，主にアスペクトとの共起関係を分析した。第五章「情態と否定」は否定がモダリティに与える影響を分析し，情態否定の相補現象や主に“没”による外部否定と内部否定及び二重否定などの情態動詞の解釈への制約を考察した。第六章「情態動詞の共起」は情態動詞の共起が多義的情態動詞の意味解釈に与える影響について検討した。

中国語ではモダリティ表現を担う一類の語を英語に倣って助動詞とする言い方や意味から「能願動詞」とする言い方が主流であったが，のちにモダリティをまさに「心情」と「態度」を一つにして“情态”という語が使われ始めるようになった。本書の著者もそれを支持しモダリティを表す一群の語を動詞と見なし，それを“情态动词”としている。

本篇の翻訳に際して，モダリティ動詞を表す“情态动词”という用語をそのまま「情態動詞」とするが，用語として使うとき以外の“情态”には「モダリティ」を用いる。本篇に挙げられる多くの文献はこの訳文の参考文献として挙げることはせず，原著の参考文献で確認されたい。なお，それらの文献の著者名は日本語の常用漢字にない漢字は中国語の簡体字を

使用したため，統一性を図るためにすべて原書のままの簡体字を使用している。

本書は情態動詞を全面的且つ体系的に考察した価値ある研究書である。同誌38号に続き今回は第二章の第三節「中国語情態動詞の意味的系統」の翻訳であるが，紙幅の関係で今号は前半のみ掲載し後半は次号に続く。また，抜粋としても読んでもらえるために，節の番号を適度に調整した。

現代中国語情態動詞の意味体系
――その単義性と多義性――

ここでは，まず，情態動詞の多義性現象に対する二つの異なる認識とその扱い方について簡潔に分析したうえ，現代中国語の情態動詞の多義的特徴の特異性――情態動詞のメンバー間の単義と多義の「不平行性」――を考察する。次いで現代中国語の単義的情態動詞を簡潔に分析したのち，より詳細に多義的情態動詞の異なる意味を考察する。それから多義的情態動詞のメンバー間の典型性の差異を分析し，重点的に四つの典型的多義の情態動詞をクローズアップする。最後には現代中国語情態動詞の表す，モダリティの意味的体系の枠組みを提示してみることにする。

1　二つの研究方法の論争

英語の情態動詞には，一般的に同じ語で二つまたは三つのモダリティを表すという多義現象，つまり，同じ語が異なる文脈のなかで違った用法を持つことによって異なったモダリティの意味解釈が得られるという現象が見られる。しかし，この現象の本質については異なる見方がある。

1.1　情態動詞の単義観

理想化した意味理論から見ると，形式と意味は一対一の対応をしており，自然言語では一つの形式が一つの意味を表していると考える。その理論の影響から，英語の情態動詞が単義であると考える学者がいる。

Ehman（1966: 10）は，次のような考えを示している。どの情態動詞にも一つの基本義（basic）を持っており，その他の意味は違ったコンテクストからその情態動詞に与えられた二の次の意味，または連想的な意味である。どんなコンテクストにおいても，また意味がどんなに変化しても基本義は常に存在している。例えば，英語の情態動詞 can[2)]の基本義は「あることに対して妨げが存在していない」である。その他の「能力」，「許可」，「可能」に相当

する意味はその基本義が異なるコンテクストから変化してきたものである。同じ見方をしているのに，Perkins（1983）がある。氏もどの情態動詞にもコンテクストから束縛されない核心的意味（core meaning）があると考えている。 Papafragou（2000: 7）も，「英語の情態動詞は単一の意味内容を持っており，異なる語用的意味と共起することによって，異なるコンテクストにおける解釈が生まれるのである」と明言している。氏はいわゆる情態動詞の多義的意味は，どれもその単一の意味内容から出発してメタ表示（メタ表象）理論と関連理論によって解釈されると考える。

中国語の文法学者も現代中国語のモダリティを研究する際に，意味を単一義に概括する努力をしている。例えば，魯晩琨（2001）では“可以”は「一つの核心的意味がある。即ち『許容の範囲を表す』ことである」と指摘した。さらにその核心的意味は三つの指向性――文中の主語指向，言外の情理的指向，聞き手指向――があるとし，その三つの指向は“可以”の三つの下位的意味形式を表していると考えている。一方，“能”の核心的意味についても，「XがYを実現させるまたはYに到達する条件を備えている」と概括できると指摘している。

しかし，情態動詞に対して行った，高度に概括した単義化した分析は，理想的な方法に過ぎない。それは次のような現実問題に直面しなければならない。まず，情態動詞のいくつかの意味の中で，核心的な意味をどう決めるか，何を基準にして決めるか；それから，先に上位にある核心的意味を決めて，その後，その核心的意味から下位分類を行なうのだが，それが本当にその情態動詞についての認識を深めるのに役立つのか。換言すれば，その上位の核心的意味は本当に他のすべての下位的意味をカバーしていると言えるのか。最後に，その核心的意味は他の情態動詞の意味も含んでいるのかどうか。もし，情態動詞の単義化処理の方法はそれらの問題に対して納得のいく解答ができなければ，その理論的現実的な価値が疑われなければならない。

1.2　情態動詞の多義観

英語のモダリティについて，多くの研究者（Leech 1971, Lyons 1977, Palmer 1979, 1986, 2001, Coates1983など）は，英語の情意動詞の多くは多義的であると考えている。例えば，Palmer（1979）は“can”の意味を，認識的モダリティの〔可能性〕，道義的モダリティの〔許可〕，動力的モダリティの〔可能〕（主観的能力と状況的な可能性を含む）とに分けている。Coates（1983）は多義についての分析方法に対して修正を行ない，同一の情態動詞の複数の意味間に変化の段階性（gradience）のグレーゾーンが存在し，同じ情態動詞の異なるパターンのモダリティは，そのグレーゾーンにおいて交差し重なることがあると考えている。例えば，氏は“can”は〔許可〕と〔能力〕の二つの意味を持っているとし，〔可能（性）〕[3)]

はその二つの意味の周辺における意味の重なりによって生まれた三つ目の意味であると考えている。

本書も，情態動詞の多義現象は自然言語に存在する事実であると考える。情態動詞に複数の意味を持ち，それらの意味の間に内在的な関連（例えば論理的または通時的な観点からの関連）がある。当然，それらの異なるモダリティの意味は，異なるコンテクストにおいてのみ確定できるものであり，言い換えれば，中立的なコンテクストにおいては，一つの情態動詞に異なる意味を持つことがある。

2　現代中国語情態動詞の単義と多義

英語の情態動詞の多義現象は，現代中国語の情態動詞の多義現象よりいくらか整然としている。換言すると，英語のほとんどの情態動詞は根源的モダリティと認識的モダリティの間で多義性を持つが，現代中国語の情態動詞は多義性を持つものは一部しかなく，その他のほとんどは単一義である。しかも，多義の情態動詞においては，多義性の度合も異なる。例えば，“敢”はふつう［勇気］という動力的モダリティを表すが，“敢是”という形式においては，［可能性］という推測のモダリティを表すこともできるため，“敢”における単一義と多義の間に著しい非対称性が見られる。もし“敢”も多義性の情態動詞と見なすならば，その多義の典型性の度合が，“能”などの多義性を持つ情態動詞よりもはるかに低いと言わざるを得ない。

2.1　単一義の情態動詞

現代中国語の情態動詞は単一義のものがある。つまり，それらが用いられるいかなる統語的環境においても一種類のモダリティしか表さない。これから情態動詞の異なる種類のモダリティから，現代中国語の単一義の情態動詞の意味を見てみることにしよう。

2.1.1　動力的モダリティを表す単一義の情態動詞

2.1.1.1　“敢”

“敢”は動力的モダリティの［勇気］しか表さない。吕叔湘（1980: 186）は“敢”の意味を「ある事をする勇気がある」と定義している。

(1)　你敢进来，算你有胆子！（老舍《四世同堂》）
　　入ってくる勇気はあるか？　度胸があるなあ！[4)]

(2)　大丈夫敢做敢当，我才不怕！（同上）
　　男はやるからには責任を持つ。怖くなんかない。

(3)　桑平原不敢点头，也不敢摇头。(毕淑敏《转》)
桑平原は首を縦に振ることも横に振ることもできなかった。

(4)　雾季一过，二奶奶没敢再喝酒。(老舍《鼓书艺人》)
霧の時期が過ぎると，二奶奶は敢えて再び酒を飲むことはしなかった。

吕叔湘（1980: 187）は“敢”はもう一つの意味—「ある判断をする自信があることを表す」とするが，その「自信」はやはり「勇気」から来ると考えられる。つまり，言わば「自信」ありきの「勇気」である。例えば

(5)　他明天能不能来，我不敢肯定。
彼が明日来るかどうか，私は敢えて断言できない（断言するする自信がない)。

(6)　我自己不敢说高明，对断症还相当的，相当的，准确！（老舍《四世同堂》)
私は敢えて自分は腕がいいとは言えないが，診断はやはり相当正確だよ。

(7)　谁敢说，瑞丰不会作到教育督办？
瑞豊が教育監査になれないと言える者がいるか？

(8)　有时候她看着象张大哥的姐姐，有时候象姑姑，及至她一说话，你才敢决定她是张太太。(老舍《离婚》)
彼女はあるときは張兄貴の姐さんに見え，またあるときはおばさんに見える。話し始めて初めて彼女が張夫人だと断定できる。(話さなければ彼女が張夫人だとは敢えて断定できない)

上記の文中にある“敢”はいずれもその後に判断，認識を表す“肯定”，“说”（“认为”の意)，“决定”が続くが，“敢”自体は「判断」の意味を持っていないため，「ある判断をする自信がある」という意味を“敢”に加えることは妥当とは言えない。これらの文の“敢”はやはり［勇気］の角度から言ったものであり，動力的メトニミーからすれば，主語が“敢”の後に来る動詞の判断を妨げるものはないということになる。

しかし，そのメトニミーのメカニズムは次の状況と関連があるかもしれない。ある特殊な構文の中で“敢”が表す意味は［勇気］ではなく，主観的に可能性が大きいと認定する。即ち“敢”の後に“是”が来る場合である。例えば

(9)　他们刀光剪影杀气腾腾的敢是抄家的？（王朔《千万别把我当人》)
彼らの殺気立っている様子からすると，恐らく家宅捜査だ。

(10)　凤姐怯怯地问:“敢是这两口子有什么不轨的行为？”（刘心武《贾元春之死》)
鳳姐が恐る恐る「その夫婦が何か道を外れることでもしているのか」と聞いた。

(11)　这两捆柴，敢是给亮亮妈砍的吧？（史铁生《我的遥远的清平湾》)
この二束の柴は，もしかして亮くんのお母さんのために刈った？

上記三つの文とも“敢”の後が動詞の“是”であるが，その時の“敢”は［勇気］を表す

のではなく［蓋然性］を表している。つまり，“敢”が認識的モダリティと動力的モダリティの間に多義性を持っていると見なすことができる。しかし，その多義性は他の多義性モダリティ動詞のように，二つもしくはそれ以上の意味が形式的に比較的バランスよく現れているのではない。現在のところ，その用法の“敢”だけ認識的モダリティを表しているケースしか見つけていないことから，その用例もあまり普遍的ではないと言える。6700万語のコーパスの中で10人の作家の小説からの20例しか , その用例はなかった。

2.1.1.2　“肯”

“肯”は動力的モダリティの「意願」（意志と願望）を表す。即ち，吕叔湘（1980: 303）で説明した「『進んで～する』という意味を表す」。例えば

（12）　只要肯学，那不用太用功。（王朔《刘慧芳》）
　　勉強する気にさえなれば，あとは頑張りすぎなくてもいい。

（13）　说吧，叫我干什么，我干什么都肯干。（王朔《顽主》）
　　言ってくれ。なんでも喜んでする。

（14）　关键只在一点，他肯不肯跳下去。（刘恒《白涡》）
　　肝心なのは，彼が飛び降りようとするかどうかの一点だ。

（15）　改良，我老没忘改良，总不肯落在人家后头。（老舍《茶馆》）
　　改善，私は改善を忘れたことがない。人に遅れをとりたくないから。

（16）　我知道，她拔下过来几回，都没肯交给我去当。（老舍《月牙儿》）
　　彼女は何回か抜いたが，質屋に持っていくために渡してくれようとしなかったのを私は知っていた。

（12）～（16）の“肯”はいずれも「意願」（～を喜んでしようとする）という動力的モダリティを表す。例えば，“学，干，跳下去，落在人家后头，交给我去当”などの意志が含まれている。

2.1.1.3　“想”

“想”は心理動詞であると同時に情態動詞でもある。情態動詞として使うときの“想”は動力的モダリティの「意願」しか表さない。例えば

（17）　我想喝点儿什么。何か飲みたい。

（18）　他很想出国。彼はとても海外に行きたがっている。

（19）　她也非常想买一个。彼女も非常に（一つ）買いたがっている。

単一義の動力的情態動詞に“愿意，情愿，乐意”もあるが，それらも実質的意味を持つ動詞であると同時に，情態動詞でもある。そのモダリティの意味のいずれも単純であるので，これ以上分析を行なわない。

2.1.2　道義的モダリティを表す単一義の情態動詞

単一義の道義的情態動詞は道義的モダリティにおいて一種類のモダリティしか表さない。初歩的な観察から，現代中国語において道義的モダリティしか表さない情態動詞は“必须”と“许”しかない。

まず“必须”について見てみよう。

吕叔湘（1980: 65）は“必须”の意味を“一定要”と同じで「事実的にも情理的にも必要であることを表す」と説明している。その意味解釈は“必须”の表す道義が「事実」に由来するものもあれば「情理」に由来するものもあることを示している。ここでは“必须”の意味を［必要］に帰結することができると考える。すなわち一種の強い［義務］，または絶対的［義務］であり，話し手が“必须”を使って道義的対象に絶対的義務を押し付け，聞き手に文の表すことを実現させるように働きかける強い気持ちを表していると考えている。

吕叔湘（1980: 65）は“必须”が文中での働きは「動詞，形容詞を修飾する，あるいは主語の前に用いられる」と指摘しているが，意味のスコープの観点から見れば，“必须”のスコープは命題全体に及ぶ。例えば

(20)　我们必须坚持真理。(吕叔湘用例)
　　われわれは必ず真理を主張し続けなければならない。

(21)　这件事别人办不了，必须你亲自去。(同上)
　　この件はほかの人にはできない。あなたが行かなければならない。

(21）の“必须”は文節の前にあるので，そのスコープはその文節全体だが，(20）の“必须”は次のように変えてもよい。

(20′)　我们坚持真理是必须的。
　　われわれが真理を主張し続けるのはしなければならないことである。

その意味構造は（20″）のようにできる。

(20″)｛必须［我们坚持真理］｝

次は“必须”のその用例である。

(22)　我必须立刻见到米兰！（王朔《动物凶猛》）
　　私はすぐ米蘭に会わなければならない。

(23)　别嬉皮笑脸的，你必须对得起我。(王朔《过把瘾就死》)
　　ニタニタしないで。私に申し訳ないことを絶対にしないで。

(24)　你必须信。(王朔《给我顶住》)
　　あなたは信じなければならない。

(25)　她必须是敏感的，机智的，毫无困难就领悟的。(王朔《许爷》)
　　彼女は機敏で，聡明で，困難に遭わなくても悟る人でなければならない。

（26）　不对，公主必须得是女儿才能当的。（王朔《看上去很美》）

いや，違う。お姫様になるのは娘でなければならない。

以上の文からわかるように，“必须”の表す道義の由来は，例えば（22）のように客観的環境から，（23），（24），（25）のように話し手から，（26）のようにある種の規定から，と言うことができる。“必须”の表す道義的目標は一般的に文の主語である。例えば（22）～（25）。また（26）のように状況全体でもありうる。（26）は“公主”に道義的要求を出したのではなく，話し手が状況全体にそうであるべきと要求するものである。

単一義の道義的情態動詞に，ほかに“许”があるが，同じように実質的意味を持つ動詞と情態動詞の二重の身分を併せ持っており，情態動詞として用いられるときは，否定の形で現れることが多い。

2.1.3　認識的モダリティを表す単一義の情態動詞

2.1.3.1　“必然”

吕叔湘（1980: 64）は“必然”を「形容詞」としているが，それが用いられる構文条件の説明に，「必然＋動／形」と「必然＋助動詞」と二つの項目が挙げられている。その二項目はまさに助動詞の典型的な用法である。とりわけ“必然”が他の助動詞が一緒に使われる用法がそうである。意味について氏は“必然”は“必定”であるとし，同書（1980: 530）では“必然”で“一定”の意味を説明するが，“必然”は「強い意志を表す」という用法はないとしている。一方，同じ構文条件にある“一定”を「副詞」としていることから，解釈の矛盾があると言わざるを得ない。本書では“一定”，“必定”，“必然”をすべて情態動詞と見なす。

“必然”は単一義であるうえ，メタ言語としての特徴を持ち，それを使って他の情態動詞の解釈に用いることができる。例えば，“必须”を道義的“必然”と説明するが，“必然”自身の意味を説明するとき，ここでは「可能の世界」という概念を用いる。すなわち，「命題があらゆる世界（局面）においてもすべて真であるとき，且つそのときに限り，その命題が必然である」。それもモダリティ論理の核心的概念の一つであり，モダリティ理論においては，符号「□」で表す。

次の文は吕叔湘（1980: 65）の“必然”の用例とコーパスから見つけた用例である。

（27）　水加温到了沸点必然变成水蒸气。（吕叔湘用例）

水は沸騰すると水蒸気になる。

（28）　看到孩子们的进步，家长必然高兴。（同上）

子供たちの進歩（成長）を見ると，親はうれしいものである。

（29）　既然先生要求做，必然有道理。（毕淑敏《最后一支西兰地》）

先生がするようにというからには，必ず理由がある。

(30)　一个人不是我们，就必然是奸党。(王小波《寻找无双》)
人は我（味方）でなければ，敵である。

(31)　琳琳知道，唐棣的出现很正常，是必然要发生的。(肖复兴《长发》)
リンリンはタンディの来訪は何も珍しいことではなく，必ず起こることだと分かっていた。

(32)　试想，如果他成功了，中国必然会向英国靠拢，英国的在华利益也必然会扩大。(霍达《补天裂》)
考えてみなさい。もし彼が成功すれば，中国は必ずイギリス寄りになって，イギリスの中国での利益の増大も必至だ。

情態動詞“必然”の後の述語には，自主的意味を持つ動詞がほとんど来ない。上記の用例のように非自主動詞（27）もあれば，心理状態を表す形容詞（28の“高兴”）もあれば，また静態動詞（29，30の中の“有”と“是”）もある。また（31），（32）の“要”と“会”のような情態動詞もある。

2.1.3.2　“可能”

情態動詞の“可能”は単一義である。“必然”と同様，メタ言語になる特徴がある。「可能」で他の情態動詞を解釈できる。例えば，［許可］を道義的［可能］と解釈する。吕叔湘（1980: 301）は“可能”を副詞とし，「“估计；也许；或许”を表す」と解釈している。本書では情態動詞の“可能”の表すモダリティを［可能（性)］と解釈する。［可能（性)］はモダリティの中心的概念であり，モダリティ論理においては◇で表す。次は“可能”が使われる例である。

(33)　他可能太累了！（肖复兴《面的司机》)
彼は非常に疲れているかもしれない。

(34)　他们可能还在开着会呢。(吕叔湘用例)
彼らはまだ会議中かもしれない。

(35)　可能她先去了建国饭店？（肖复兴《四月的归来》)
彼女は先に建国飯店に行っているのかもしれない。

(36)　我们可不可能建成一个美满的家庭？（刘心武《一窗灯火》)
私たち，円満な家庭を築くことができるでしょうか。／……円満な家庭を築く可能性はありますか。

(37)　你们说可能不可能吧？（王朔《一半是火焰，一半是海水》)
その可能性はあると思いますか。

2.2　多義的情態動詞

2.2.1　“得”（děi）

“得”（děi）は道義的モダリティの［必要］と認識的モダリティの［必然］の間の多義性を持っている。

“得”（děi）が表す道義的モダリティの［必要］：

吕叔湘（1980: 143）は，“得”（děi）は「情理的，事実的または意志的な需要を表す」とし，“应该”，“必须”を用いてそれを説明しているが，ここではその意味を［必要］に帰結し，“必须”と同じように，強い「義務」でもあると考える。強い義務を表す“得”と強い義務を表す“必须”の間の区別はおおよそ以下のようである。

“得”（děi）はその道義的な出自から，より状況に傾いているが，“必须”は話し手の権威に傾いている。従って，“得”（děi）の道義的意味はより多くの客観性を持っている。それを“得”の否定形の“不用，甭”からも少し窺える。“不用”は常に客観的状況の要求から言っているものである。一方，“必须”の否定形“不必”はどちらかと言えば，話し手の権威から聞き手が，あることをする，またはしないことに対して「許可」するものである。客観的状況の要求を強調するからこそ，“得”（děi）で指令を出した時，話し手はその指令になお“商量”の（相談する）ニュアンスが残っていると感じる。従って，聞き手がコミュニケーションにおける役割の違いによって丁寧さの度合いに対する要求も違うので，話し手が“得”か“必须”を選択することになる。

また，“得”（děi）と“必须”は文体上のニュアンスの区別もあるようだ。つまり，“得”（děi）は“必须”よりも口語的である。

以下は“得”（děi）が道義モダリティ［必要］を表す場合の用例である。

(38)　遇事得跟大家商量。（吕叔湘用例）
　　事あるごとにみんなに相談しなければならない。

(39)　你得快点儿，要不然就晚了。（同上）
　　早くしなきゃ遅れるよ。

(40)　这件事得你来做。（同上）
　　この件はあなたがやらなければならない。

(41)　这个工作得三个人。（同上）
　　この仕事には三人必要だ。

“得”（děi）が表す認識的モダリティの［必然］

吕叔湘（1980: 143）は“得”（děi）の認識的モダリティを「“会”であり，必然的にそうであると見積もる」と説明する。つまり，話し手は“得”（děi）を用いて一定の証拠を基に

［必然］的な推定をすることができる。例えば

(42)　他准得来。(吕叔湘用例)
　　彼はきっと来るでしょう。

(43)　快把麦子垛起来，要不然得挨雨淋。(同上)
　　早く麦わらを積みましょう。でないと雨にぬれる。

(44)　这么晚才回去，妈又得说你了。(同上)
　　こんなに遅くに帰ると，またお母さんに叱られるよ。

(45)　哟嗬，可不是嘛，起码得有三十七八度…（霍达《绝症》)
　　あら，そうね。少なくとも三十七八度はあるはずよ。

(46)　王德心里想：他们要打起架来，掷起刀叉，游人得有多少受误伤的！（老舍《老张的哲学》)
　　彼らが喧嘩になり，ナイフやフォークを投げだすと，どれだけの観光客が巻き込まれることになるだろうと王徳は思った。

(47)　还是那句话，得是偷的抢的。(邓友梅《那五》)
　　同じことを言うが，たぶん取ってきたか奪ってきたかのどっちかだよ。

(38)～(47) の例文から，“得”（děi）が認識的モダリティを表すのには統語的な制限がより多いことが伺える。主要述語は“是”，“有”のような静態動詞か主要述語または述語フレーズが“说你”，“挨淋”のようなネガティブな意味を持つかである。

上述の通り，情態動詞の“得”は多義的であり，道義的モダリティの［必要］も認識的モダリティの［必然］も表す。

2.2.2　“一定”（“必定”）

“一定”は道義的モダリティの［義務］と認識的モダリティの［必然］の間で多義性を持つ。

まず，“一定”の道義的モダリティを表す場合を見てみよう。

“一定”は道義的モダリティの［保証］を表すことができる。話し手は“一定”を用いて，あることを真であらしめる［保証］を表す。［保証］は強い義務に相対する道義的モダリティであり，［義務］は話し手が聞き手に，ある義務を提起し，聞き手が文の表す事件を実現させるよう要求するのに対して，［保証］は話し手が自分自身に，［義務］を強いて文の表す事を実現させることを自分自身に要求する。その意味から［保証］も一種の［義務］であると言える。

吕叔湘（1980: 529）は“一定”の意味を説明する時，「断固たる意志を表す」としているが，“一定”の表す“意志”と“肯”，“想”，“要”などの表す［意願］（意志と願望）の動力

的モダリティとは異なっている。例えば，“肯”，“想”，“要”などが［意願］を表す時，聞き手に対する指令を表すことができない。指令とするときの“要”は道義的モダリティの［必要］を表す。

吕叔湘（1980: 529）では“一定”は「断固たる意志を表す」時，「多くは第一人称に用いられる」と指摘している。それは［保証］の意味の本質と一致している。なぜなら［保証］はそもそも話し手が言い出すもので，一種の自分に言い聞かせる［義務］である。続いて氏は，「第二人称，第三人称に用いられるときは常に他人が必ずそうするように要求することを表す」と指摘している。従って“一定”は他人に［保証］をするように求めるにも用いられ，つまり，他人に［義務］を負うように求めるのである。例えば

(48)　我一定照办。（吕叔湘用例）
　　必ずその通りにします。

(49)　对不起，对不起刘老师，回去我一定好好教育他。（王朔《我是你爸爸》）
　　申し訳ありません。申し訳ありません劉先生，帰ったら必ずしっかり教育します。

(50)　今后我一定改，再也不了。（同上）
　　これから必ず改めます。これからはそういうことのないように。

(51)　我一定不忘记你的嘱托。（吕叔湘用例）
　　おっしゃったことを私は必ず忘れません。

(48)～(51) は全部第一人称であり，文の主要動詞が全部自主的行為動詞で，“一定”は話し手である“我”の［保証］を表している。つまり，話し手が道義的立場から聞き手に文の表す事件が発話後の可能的世界において実現する必要性があることを保証するのである。次は第二人称の場合を見よう。

(52)　到时候你一定带你那胖子来喝喜酒呵。（王朔《无人喝彩》）
　　その時には必ずあなたの太っちょを連れて祝い酒を飲みに来なさいよ。

(53)　她，我就托付给你了，你一定代我好好照顾她，千方百计——让她幸福。（同上）
　　彼女のこと，あなたに託す。必ず私の代わりにしっかり面倒を見てやって，手を尽くして彼女を幸せにしてやってください。

(54)　希望你一定坚持你这样的写法，我们需要！（刘心武《心灵探索的三齿耙》（自序））
　　必ずあなたらしい書き方をし続けてください。私たちはそれを必要としています。

(55)　到时候我们组织外国人比赛给您送两张票，请您一定去临场指导。（王朔《千万别把我当人》）
　　外国人の試合を主催する時は，チケットを差し上げます。ぜひともその場でご指導いただきたいと思います。

(52) と (53) は全部第二人称で，“一定”は聞き手である“你”への指令を表す。つま

り，聞き手が［保証］するよう求める。その［保証］は道義的目標の“你”から自発的に出されるものではないので，外的力によってその［保証］を押し付けることがある。従って，(54) と (55) では“一定”のある文節が「外力」となる語句の“希望”と“请”の目的語になっている。

第三人称の場合，［保証］は“他”に保証させる外的な力があるかもしれない。または話し手が“他”の立場に立って，“他”に代わってある種の［保証］を遂行する。例えば

(56)　他呀，今晚语言学院有学生迎接“五一”的联欢会，请他一定参加，还要他演出个节目。(肖复兴《四月的归来》)

彼ですか？　今晚語言学院の学生のメーデーを祝うパーティがあるが，彼にはぜひ参加してもらって，出し物をしてもらおう。

(57)　你等着，晚上他一定来，他要是不来，我陪你看电影去。(老舍《二马》)

待っていて，彼は夜必ず来てくれる。彼が来なければ私が映画を観るのを付き合おう。

(58)　他一定把梦莲引领到“正路”上来。(老舍《火葬》)

彼は必ず夢蓮を「正しい道」に導いてくれる。

それらの文では“一定”の前はすべて第三人称である。(56) は“他”に保証するように強いる外的な力があり，その外力の標識が“请”である。一方，(57)，(58) は話し手が“他”の立場に立って，“他”の代わりにあることを実現させるよう保証する。

保証はある事柄に対するものだが，道義に対する「保証」であることもありうる。統語的には［保証］を表す“一定”の後に道義的モダリティを表す情態動詞が来ることがある。例えば［必要］を表す“要”“得”，または道義の否定，例えば不［許可］を表す“别”，“不能”などがある。例えば

(59)　米米，你一定要争口气，以后考上一个正儿八经的大学！(毕淑敏《同你现在一般大》)

ミミ，絶対負けるなよ，ちゃんとした大学に合格するんだ。

(60)　领导一定要深入群众。(吕叔湘用例)

指導者は必ず大衆の中に入ることが必要だ。

(61)　唉呦，你一定要给我引见引见你这位设计师。(电视剧《编辑部的故事》)

まあ，ぜひともそのデザイナーの方を紹介してよ。

(62)　你一定得抽时间看看他。(吕叔湘用例)

必ず時間を作って彼に会いに行ってやってください。

(63)　你一定别忘了。(同上)

くれぐれも忘れないように！

（64）　这种药一定不能乱吃。（同上）

この薬はくれぐれもむやみに飲まないように！

（59）～（62）にある“要”または“得”は［必要］という道義的な意味を表すものだが，情態動詞の前に“一定”が来ると，道義的な［保証］を表している。例えば（59）は“米米”に「“争气”する」という強い義務を［保証］することを求めている。（60）は話し手が“领导”の代わりに“深人群众”の強い義務を［保証］している。

保証の内容は事件でも道義でもありうるが，一般的に意思，願望，能力や可能性ではない。“一定”の後にそれらの意味を表す情態動詞，例えば“肯、想、能、会”が来ると，“一定”はもはや［保証］の意味ではなく，認識的モダリティの［必然］を表すことになる。従って，吕叔湘（1980: 529）は（65）も“坚决的意志”（断固たる意志）を表すと考えていることについてはさらに検討する必要がある。

（65）　他一定要去，就让他去吧。（吕叔湘用例）

彼がどうしても行きたいのなら，行かせてあげましょう。

（66）　你一定要送我，就送我一件铁锈红的。（毕淑敏《苔癣绿西服》）

どうしてもくれるというのなら，えんじ色のをください。

その二つの文の中の“要”はいずれも［意願］（意志と願望）を表すもので，話し手がその［意願］の存在する必要性を推定するにすぎない。従って，その二例の“一定”が表すのは道義的モダリティの［保証］ではなく，認識的モダリティの［必然］を表しているのである。一方，下記（67）は“要”が［意願］と［必要］の両方の意味を持つ可能性があるので，“一定”も［必然］と［保証］の両方の意味に解釈される可能性がある。

（67）　头三脚难踢，他一定要踢响这头一脚。（肖复兴《当金山的母亲》）

最初がたいへんだが，彼はきっといいスタートを切るものだと思っている。／……

彼は必ずや，よいスタートを切らなければならない。

“一定”の［必然］という認識的モダリティを表すことを，吕叔湘（1980: 529）は「必然であり，確信して疑わない」と述べている。その認識的モダリティとしての“一定”の用法は道義的モダリティとしての“一定”の用法よりも一般的であるが，ここではこれ以上の説明は省く。

以上見てきたとおり，情態動詞“一定”は道義的モダリティの［保証］と認識的モダリティの［必然］の二つのモダリティを表していることが分かる。

2.2.3　“肯定”

“肯定”も多義的情態動詞の一つである。“肯定”の情態動詞としての身分については，许和平（1991）は，それを“必然”や“一定”と比較したうえ，“肯定”と“可能”の方がよ

り多くの「対称性」と「一致性」を有する。従って，“必然”や“一定”よりも情態動詞としての資格を備えていると考えている。氏の情態動詞の分類の図式の中で，“肯定”の意味は「判断的な必要」と規定しており，主観的な認識的モダリティに属しているとしている。ここでは“肯定”このような意味を［必然］と表示し，語用的には事件または命題の［必然］的推定を表すとする。“必然”や認識的モダリティを表す“一定”と違う点は，それはより話し手指向に傾いている。言い換えれば，話し手の主観性がより強いと言える。例えば

(68)　算了吧，等了这么半天，肯定那边把电话挂上了。(许和平1991年用例)
もうよしましょう。こんなに待たされていては，向こうは電話を切ったに違いない。

(69)　离最后胜利的日子肯定不远了。(同上)
最後の勝利まではもう遠くないに違いない。

(70)　你肯定认错了。(《编辑部的故事》)
君は見間違えたに違いない。

(71)　就是说他们肯定会回来？（王朔《橡皮人》）
つまり，彼らは帰ってくるのは間違いないってこと？

(72)　人家肯定要问的。(王朔《给我顶住》)
きっと聞かれるに違いない。

これらの文の“肯定”はどれも命題または事件の［必然］性についての主観的推断を表している。しかし，许和平（1991）の分類では“肯定”を単一義としているが，それでは次の例文を説明できない。

(73)　要是咱俩单独约会我肯定请你吃。(王朔《顽主》)
もし私たち二人だけ会うなら必ずおごってあげる。

(74)　我不捐，我肯定不捐。(王朔《你不是一个俗人》)
私は寄付しない。寄付しない（寄付ってあり得ない)。

(75)　放心，我肯定给你找来就是了。(王朔《给我顶住》)
安心して，必ず探し出してくるから。

これらの文の“肯定”はどれも［推断］の意味がなく，話し手がある［保証］（約束）をしているのである。それは道義的モダリティに属し，つまり話し手は道義的に文の表す事件が未来の時間において真になることを自ら保証しているのである。

従って，“肯定”もまた多義的情態動詞であり，二つのモダリティを表す。一つは認識的モダリティの［必然］であり，もう一つは道義的モダリティの［必要］である。しかし，その［必要］的道義の由来は道義的目標との一致，つまり話し手が自分に道義的要求を出したうえ，聞き手（つまり話し手自ら）に対して文の表す事件が，未来において真になることを

保証する。従って，その点においては“一定”との違いは“肯定”が［保証］として解釈されるときは，主語の人称に特別な条件，即ち第一人称であることを要求する。

2.2.4 “准”

『現代漢語虚詞例釈』(1982: 561）では，“准”は北方方言でよく使われる副詞で，意味は“一定”に相当しているとし，次のように二つの解釈を与えている。一つ目は，「状況に対する見積もりと推測を表し，語気はかなり断定的である」。二つ目は，「約束を表す場合，肯定の語気を表す」。ここでは，「許可」を表すという三つ目の意味があると考え，それを三種類のモダリティを表す多義的情態動詞として分類する。一つ目は認識的モダリティの［必然］であり，二つ目は道義的モダリティの［必要］であり，語用的な意味においては［保証］として表される。三つ目は道義的モダリティの［許可］であり，常に否定の形で現れる。

“准”の認識的モダリティの［必然］の意味：

(76)　卖假药，多赚钱，病人吃了准玩儿完。(霍达《年轮》)
　　儲けばかりの偽薬，病人が飲んでもこりゃダメだ。

(77)　没说的，这坏点子准是于观出的。(王朔《顽主》)
　　言うことがない。その悪いことを考えたのは于観に間違いない。

(78)　人家准会恼我们。(同上)
　　きっと怒られるに違いない。

(79)　人跑不了，准在这院里。(王朔《千万别把我当人》)
　　やつは逃げられない。きっとここの庭の中にいるに違いない。

(80)　您看着瞧吧，到时候准吓您一跳。(王朔《懵然无知》)
　　見てのお楽しみ，その時になったらきっとびっくりなさるでしょう。

(76)～(80）の中の“准”は話し手が状況に対する推断，即ち［必然］的な推断を表す。その意味の“准”の否定の意味は特殊なもので，“没准”または“未准”である。

“准”の道義的モダリティの［必要］の意味：

(81)　明天我准来找你。(《现代汉语虚词例解》用例)
　　明日必ず誘いに来る。

(82)　礼拜天我准来。(霍达《穆斯林的婚礼》)
　　日曜日は必ず来る。

この二つの文の“准”は話し手が進んで自分に［必要］という強い義務を出している。即ち義務の由来は目標と一致しており，その典型的な表し方は話し手が主語で第一人称の“我”を用いることである。その制限があるため，“准”のこの種の保証における［必要］の意味を表す用例は比較的少ない。

“准”はまた道義的由来と目標が不一致の道義的モダリティを表すこともできる。注意すべきは“准”はこの点において特殊性があり，つまり，その道義的な意味は（81）と（82）の表す道義的意味よりも低レベルの［許可］である。例えば

（83）　归里包堆只准用一间房。（邓友梅《四合院“入门儿”》）
全部ひっくるめても一間しか使えないよ。

（84）　我说过多少回了，你不准进这三间房（陈建功《皇城根》）
何回も言ったが，君はこの三つの部屋には入ってはいけないよ。

（85）　辅导员在大会小会上严肃的宣布，谁也不准去那个洞。（张辛欣《我们这个年纪的梦》）
指導員は会議があるごとに，誰一人その洞窟に入ってはいけないと厳しく宣告している。

（86）　不准乱跑，听到没有？（于晴《红苹果之恋》）
走り回るな。聞こえているか？／走り回るなってば

（83）～（86）の“准”は全部［許可］の意味を表すが，それらの文は統語的に特別な制限がある。例えば（83）の“准”は前に範囲を限定する“只”があり，唯一の［許可］を表す。一方，他の三つの文は全部否定文で，話し手の出した禁止の命令を表す。

2.2.5　“要”

“要”は動力的モダリティの［意願］（意志と願望），道義的モダリティの［義務］と認識的モダリティの［必然］の三種類のモダリティを表す。

まず，“要”の動力的モダリティを見よう。

“要”は動力的モダリティの［意願］を表すことができる。即ち，主語がある事件を真にならしめる［意願］を持っていることを表す。吕叔湘（1980: 520）はその意味を「あることを行なう意志を表す」としている。例えば

（87）　我要洗澡了。
私はお風呂に入るよ。

（88）　王一生又呆了一天，第三天早上，执意要走。（阿城《棋王》）
王一生はさらに一日滞在したが，三日目になってやはりもうどうしても行きたい（帰りたい）と言い出した。

（89）　我不在你们这儿上学了，我要回去！（毕淑梅《转》）
ここの学校に行くのをやめる。帰る！

(87)～(89) の“要”は［意願］という動力的モダリティを表す。例えば,「お風呂に入るという意志と願望がある，行くという意志と願望がある，帰るという意志と願望がある」など。

次に“要”の道義的モダリティを見よう。

“要”は［義務］という道義的モダリティを表すことができる。吕叔湘（1980: 520）はその意味を“须要; 应该”と解釈している。ここでは“要”のこのような意味要素を［義務］と，語用的には［指令］として，話し手が事件が真になるのを要求することを表すと考える。例えば

(90)　要本分。(电视剧《北京人在纽约》)
　　分をわきまえなければならない。
(91)　借东西要还。(吕叔湘用例)
　　借りたものは返さなければならない。
(92)　只是路有些远，男同学要帮助女同学。(阿城《孩子王》)
　　ただ距離が少し遠いが，男子生徒は女子生徒を助けるべきだ。
(93)　是也要交这么多钱吗？（毕淑梅《转》)
　　同じようにこれだけのお金を払わなくてはならないか。

吕叔湘（1980: 520）は，この意味の“要”の否定形は“不要”で,「禁止や説得に多く用いられる」。しかもこれらの“不要”は“别”と置き換えることができるとも述べている。例えば

(94)　不要随地吐痰。
　　痰を地面に吐いてはいけない。
(95)　请他不要多管闲事。
　　彼に余計なことをしないように。

Alleton（1994）は［意願］が“要”の基本義であり，道義的モダリティの意味は第二義的であるとしている。“要”の［意願］と［義務］の二つのモダリティの意味の分布は，話し手と動作との関係によって決められる部分がある。中立な文脈においては“我要”は“我需要”という意味であり，“你要”は“你必须”という意味である。第三人称については二つの解釈とも存在する。“他要”がどのモダリティを表すかは，他の要素を考える必要がある。

最後は“要”の認識的モダリティを見てみよう。

“要”は認識的モダリティの［必然］を表すことができ，話し手が事件の事実性または命題の真実性に対する［必然］的な推断を表す。

(96)　那是很野蛮的运动，要伤身体的。(阿城《孩子王》)
　　それは野蛮なスポーツだ。体を痛める。
(97)　他不知道要挨批评的呀？（铁凝《麦秸垛》）
　　彼は叱られるとは思わなかったのか。
(98)　这位痴痴呆呆的小老弟，看样子要陷入单相思了。拉他一把，义不容辞。(毕淑梅《看家护院》)
　　その一途な若者は，片思いに陥っているようだ。助けてやろう。当然の責任だ。

(96)～(98) の“要”は未来における事件発生の［必然］性に対する推断である。例えば，(96) は“进行那种运动必然伤害身体”（その運動をすると必然的に体を痛める）ということに対する推断で，(97) は“必然挨批评”（批判されるのが必至だ）ということに対する推断である。(98) は“小老弟陷入单相思”（若者が片思いに陥る）ことの必然性に対する推断である。

吕叔湘（1980: 521）は，この“要”の意味を「可能性を表す」と解釈しているが，その「可能性」と“可能”自身の表す可能性の度合いに大きく異なっている。つまり“要”は可能性の程度においては“可能”よりずっと大きく必然性に近い。従って，本稿ではやはり“要”のこのような意味を［必然］としたい。

次の文の“要”は一般的に“将要”と解釈され（たとえば吕叔湘1980: 521），事件がもうすぐ発生することを表す。まさに英語の will と同じで，未来の時間を表すほか，この場合の“要”は，やはり発話する時点からみる未来（の世界）に事件が実現する必然性に対する推断である。例えば，“将”について，一般的にもっぱら未来の時間を表す副詞であると考えられているが，次のような文脈に出ている“要”は“将”と置き換えできない。

(99)　要下雨了。
　　もうすぐ雨が降りそうだ。
(100)　方叉子摇摇摆摆，绝望地在上面东奔西走，像一只无家可归的饿狼，眼看就要倒下去了。(刘恒《黑的雪》)
　　方叉子はふらふらして絶望的に上をうろつき，まるで帰る家のない飢えた狼のようで，今にも倒れそうだ。
(101)　我迷迷糊糊地快要睡着了，也没听清，嗯嗯地点头。(王朔《过把瘾就死》)

わたしはうとうとして眠れそうになり，はっきり聞こえないまま，うんうんと頷いていた。

これらの文の“要”は主に事件が未来の間において実現する必然性に対する推断を表している。例えば（99）は発話時刻の近未来に“下雨”の必然性を表すもので，聞き手に未来においての客観的事実を述べるものではない。そして，（100）も話し手がある種の証拠に基づく推断を表し，（101）も同じ解釈ができる。

上述したことから，事件出現の必然性に対して推断する場合，“要”は未来の時間と密接な関係があることが分かる。従って，“要”は過去の時間においての事件の真実性の推断に用いられる場合，仮定の角度から事件の必然性に対して仮定的な推断しかできない。ある意味では一般的に仮定を表し“如果”として解釈される“要”の“要是”と特に留意すべきその反対の“别是”も，非現実の状況下の事件の必然性の推断，つまり仮説的推定であると言える。このことは実現体マーカー“了”及び経験体マーカー“过”と共起した時により明らかである[5)]。

もう一つ，比較文に用いられる“要”がある。吕叔湘（1980: 521）では「見積もりを表す」と解釈されるが，実際，これも話し手が対比したうえで下った必然的推断であると言える。例えば

（102）我看得出这位李凌要比你头脑开放！（肖复兴《金山的母亲》）
私にはこの李凌という人はあなたより考え方が進んでいると思える。

（103）她想，我最起码要比他大六七岁，但这又算什么呢，人人都觉得我比实际年龄要小，我的外表和年龄也是不成正比的。（赵波《穿行在城市》）
彼より少なくとも 7， 8 歳は上でも，どうということはない。人々は私のことを実際の年齢より若いと思っているし，私の見た目も年齢とは比例していないと，彼女は思っている。

（104）我看着他的眼睛，他的眼睛总是不停地眨着，频率要比正常人快。（赵波《情色物语》）
私は彼の眼を見ている。彼はいつも絶えず眼をぱちぱちさせ，まばたく頻度は普通の人より速い。

（102）は“李凌比你头脑开放”という命題の必然性に対する推断であり，（103）は“我比他大六七岁”，“我比我的实际年龄小”という命題の必然性に対する推断であり，そして（104）も“频率比正常人快”という命題の必然性に対する推断である。もし，それらの文の中の“要”を取ってしまうと，話し手の推断の意味が無くなり事実についての陳述になってしまう。

上述したことから，情態動詞の“要”は三種類のモダリティ，即ち動力的モダリティの［意願］，道義的モダリティの［義務］と認識的モダリティの［必然］を表すことができると言える。なかでは，認識的モダリティの［必然］は未来への推断と過去への仮定を含める。

注

1）紙幅の関係で第三節の前半部分（pp. 120–141）の翻訳のみ掲載することとした。便宜上，章，節の番号は調整してある。なお，［解題］については，拙訳「彭利貞　中国語情態動詞の表すモダリティ―情態動詞のカテゴリーとその位置づけ―」（2018）愛知大学『言語と文化』No. 38と同一書物のため，そちらと重複する部分もあるが，合わせてご参照されたい。

2）英語では「助動詞」としているところの can を原書では「情態動詞」としている。論を進めるにあたり，ここでは原書の表現のままにする。

3）「可能（性）」：原文では「可能」であるが，中国語の“可能”は「できる」意の「可能」より「可能性」を表す。従って，日本語訳では「可能（性）」とする。以下認識的モダリティについては，すべて「可能（性）」とする。

4）情態動詞の意味が伝わるように，ここでは敢えて定訳を使わず，筆者の訳による（ネイティブチェック済）。なお，原書では例文の番号にずれがあったため，翻訳では修正した。よって原文と例文の番号が一致していない。なお，説明文においても修正した番号に合わせた。

5）これについては同書第四章「モダリティとアスペクト」で論述している。

参考文献

彭利贞（2007）《现代汉语情态研究》中国社会科学出版社
澤田治美 編（2014）『ひつじ意味論講座 第3巻 モダリティⅠ：理論と方法』ひつじ書房